

西欧的な計画手法と異なる、新しい計画原理と手法

制作：近畿支部支部長 小島 孜

近畿支部の情報はこちら
http://www.jia.or.jp/kinki/

一万人の世界建築家展
http://www.10000architects.com/?jp

日本の木造建築をヒントに、震災復興に関連した新たな切り口を見出す

① 弱点を補い合う
「部分の共生的な関係」
をつくることで
全体性能を高める。

② 弱い材料を重ね合わせる
ことで全体性能を高め、
優しさ・美しさを生み出す。

③ 隣接する要素を
共通のルールで関係づけ、
全体として
新たな価値を獲得する。

④ 弱い材で構成された
木構造をヒントに
新しい構造アイディアを
発想する。

⑤ 人と技術の伝承により、
弱くてはかないもの、
形のないものを伝承する。

⑥ デザインの構成には
「真・行・草」
の三態がある。

⑦ 人の意識を開放する
癒しの空間は、
空間スケールに応じた
細部に宿る。

⑧ 弱くて小さなものは
「遊び」を設けることで、
強くて大きいものに柔軟に
対応することができる。

土壁を守る深い庇



深い庇が水に弱い土壁を雨から守り、瓦と土壁が火に弱い木造の弱点をカバーする共生的な関係が、木造建築の密集する集落や都市を可能にした。

サンゴ礁の生態系



動物であるサンゴは、光合成をおこなう褐虫藻を内に取り込み守ることで、澄んだ水の中でも栄養分を確保し、またその群体であるサンゴ礁は多くの魚に安全な居場所を提供し、1つの生態系を形成している。

茅葺の屋根



萱や桧の板を何層にも重ねて葺き上げた茅葺や柿葺の屋根は、貧弱な素材を重ねて厚みを増すことで、素材単独では持ち得なかった優しい美しさを生み出している。

阿修羅像



美しさと優しさと荘厳さを併せ持つ興福寺の阿修羅像は、麻布を漆で重ねてできた乾漆仏像であるが、その軽さについて知ること、愛おしさの感覚も生まれてくる。

坪庭のある町屋



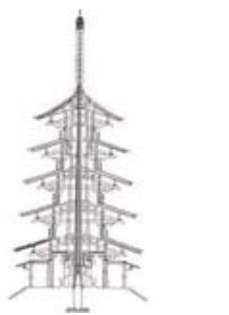
町屋においては、坪庭の位置や2階建て部分の位置に一定の約束があり、全体として採光や通風などの居住性が担保されている。

V字飛行する渡り鳥



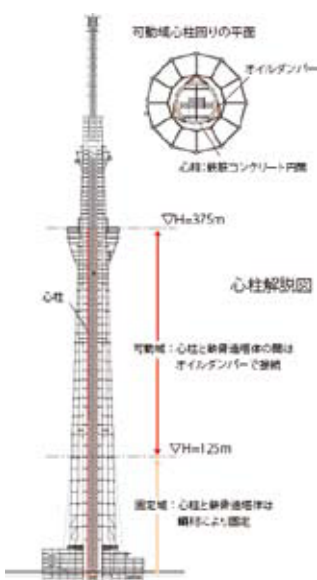
鶴、白鳥、雁など渡り鳥は、V字状に並んで飛ぶというルールを守ること、先の鳥が翼で風を切って浮力を生み出す際、翼の先端に生じる渦状の気流に次の鳥が乗っかかり、スタミナの消耗を抑えている。

五重塔の心柱



五重塔の心柱は、心礎の上にただ置かれていたり、1層目の梁に乗っていたり、上層で吊り下げられているものまであって、五層目の屋根部分で水平方向に固定されただけの地震の揺れを直接受けない構造になっており、塔全体に対しては免振的な役割を果たしている。

東京スカイツリー



五重塔の心柱をヒントに東京スカイツリーでは、中央部に設けた鉄筋コンクリート造の円筒（＝心柱）と外周部の鉄骨造の塔体を構造的に分離し、中央部の心柱上部を「重り」として機能させた新しい制振システムを採用している。

津波では、水圧力と表面波の震動・波力に加え浮力が働き、それが木造住宅に大きな被害を与えました。浮力に対する抵抗力の弱い木造で、どう浮力をそらし逃がすのか、構造家のアイディアが求められているようです。

伊勢神宮



20年に一度の式年遷宮で伊勢神宮は、耐久性の劣る掘立柱の神殿そのものと、技術を受け継ぐ人材と文化そのものを継承している。

能または歌舞伎



能や歌舞伎など日本の伝統芸能は、世襲という人の継続によって芸と技術を継承し、時代を超えて、様式的な舞台空間を再現し続けている。

ねぶた祭り



毎年3月11日には、マス・メディアによって東日本大震災に関連する様々な報道がなされるでしょうが、それでも記憶は徐々に失われていきます。長く記憶を継続するためには、出来事を通して新たな記憶を再生産する必要があります。災害を記念するメモリアルな建築をつくるよりは、東北三大祭りに肩を並べる新しい祭りやフェスティバル、参加することが記憶の継承になり、次世代への「語り継ぎ」になるようなイベントを、時間をかけて育てましょう。

桂離宮の敷石



桂離宮の中門から正玄閣である御奥寄までは切り石を組み合わせた「真」、外腰掛けでは切り石と自然石を組み合わせた「行」、茶室の笑意軒では自然石だけの「草」の敷石が使われている。

盆栽と自然樹形



庭木にも真・行・草の区別がある。理想的な樹形を強制的につくった盆栽は「真」、自然樹形は「草」、中間の「行」としては日本庭園の剪定された庭木を挙げることができる。

三陸海岸の漁村風景



三陸海岸のまちに「真」は似合いません。自然材料や安価な工業製品を使いながらも創意に満ちた「行」や「草」の、そして「きれい」より「美しい」まちの創造的再生が望まれます。また復興計画には、理想のイメージを強制する盆栽型の都市計画（真）よりも、今までのまちの姿を尊重しバランスに配慮しながら不都合な部分だけを修正する、剪定型のまちづくり（行）の方が向いています。

如庵の内部



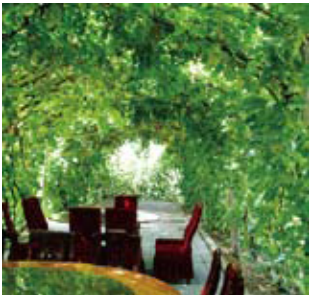
極小空間へと進化した草庵茶室では、人の意識は壁や天井といった空間の構成要素を越えて、土壁の粒子の大きさや色の変化、面皮床柱の木目模様などの細部に向けられる。そのとき意識の中の空間は、スケールの超えた広がりを持ち始める。

イスファファンのモスク内部



イランのイスファハンにある「王のモスク」の大ドーム内部は、アラベスク模様の彩色タイルで包まれている。ここでも人の意識は、頂部に向けて収斂する模様の世界に引きこまれ、スケールのない広がり感が現象している。

ぶどう棚のカフェ



心に大きな傷を持った人々にとって、様々な要素から成り立っている自分と、何かを構成する要素の一部としての自分を、同時に感じ取れる癒しの空間が必要です。そうした空間として、豊かな細部を持ち、自らのなかに時間を蓄えた植物のような建築、自然材料を活かした建築が似つかわしい気がします。

民家(旧新井邸住宅)



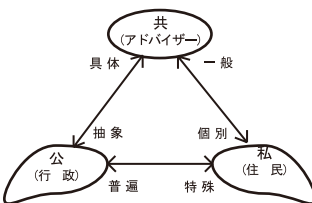
民家の多くは、木造の架構が東石の上に乘っているだけで、大地との間に「遊び」を設けて地震力をかわし、屋根を重くすることで風圧力に抵抗している。また貫構造の軸組みにも「遊び」があり、接点の数を増やすことで全体としての抵抗力を増している。

原子力発電所



巨大な原子力エネルギーを人間がコントロールするため、制御可能な技術を複雑に組み合わせ、システム全体で対処していたのが原発である。今回の福島原発の事故は、複雑化により増大するリスクを回避するためには、システムを構成する要素同士の接点に、適度な「遊び」と「フィードバック回路」が必要だということを示唆している。

公と私と共の三極構造



被災住民にとっては、国も県も市町村役場も強くても大きな存在です。弱くて小さな存在である住民と行政とのより良い関係を考えた時、両者の間に何らかの「遊び」と「フィードバック回路」を設けることが重要です。例えば、復興まちづくりにおいては、行政（公）と住民（私）の主張や思いの違いを専門家アドバイザー（共）が調整する、三極的な構造が有効です。